

## やもめの息子を生き返らせる

ルカによる福音書 7:11-17

(そのとき、) イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

### 説教

聖書をどう読むか、聖書をどう聞くか、似たような言い方ですが「聖書を聞く」というのは日本語の文章としてはおかしい感じもします。ここでは違いをつけるという意味合いで、読むということと頭で読むという事とし、聞くという事を心の耳で聖書の声を聞くというふうにしておきます。

きょうは「やもめの息子を生き返らせる」という見出しのついた聖書箇所です。イエスがナインの町を通りかかったところ葬儀がおこなわれていて、その母親が嘆き悲しんでいた様子をイエスが見て母親を憐れみ、棺に手を触れて「起きよ」というと死んでいた若者は生き返ったというエピソードが記されています。

このエピソードに違和感があるとすると、やもめの母親はただ嘆いているだけなのに、つまりイエスに助けを求めていないのに、救いのわざ＝死んだ息

子の生き返りにあずかっている点です。イエスの奇跡は福音書には数多く記されています。それはだいたい病人や障害者がイエスに助けを求めイエスがそれに応えるというお話になっています。きょうのナインのやもめには助けを求めるといふ情景が記されていません。助けを求めていないのにイエスはやもめを助けた、このやもめ、死んだ息子とイエスのかかわりというか、つながりはわからないまま、奇跡がおきた。福音書によればただの通りすがりの関係としか読めないのに、奇跡がおきた。ここの点がほかのはなしとは違っているなあという違和感です。

これを解消するために、かりに頭でこの福音を読むと次の節に書いてある洗礼者ヨハネとイエスのやり取りにつながる伏線として読むこともできます。次節、ルカ7章18節以下には、獄中にいるヨハネが使者をイエスに送り、あなたはメシアなのかと再度問い質したと記されています。それに対するイエスの返事はこうでした。

**それで、二人に（ヨハネがイエスに送った使いのもの）こうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」ルカ7:22-23**

やもめの息子の生き返りはイエスが言う「死者は生き返り」の裏づけのエピソード＝伏線になっているということがわかります。頭で読むと洗礼者ヨハネとのやり取りを補強するためにこのエピソードを直前に編集したのかなあとなります。でもこの解釈ではうすっぺらい感じが残ります。

一方、聖書を聞くという立場から解釈してみるとどうなるかというと、人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。ルカ7：16-17

人々は恐れ、そして賛美した、と記録されています。この奇跡に対して人々

は靈的に反応しています。なにかのインチキだろうとか、悪魔のわざだとかではなく、恐れつつも神に感謝し、賛美しています。「みことばを聞く」という見方では、このユダヤの人たちが反応したようにみことばを聞き取りましょうという薦めになるのでしょうか。

やもめの女が頼りにしている息子が死んでしまった。嘆き悲しんでいるのをたまたま通りすがりに見たイエスは息子を生き返らせた。預言者や神を身近に感じているナインの町の人たちは実際のイエスに預言者の働きを見て恐れつつも賛美した、この事実は驚くべきことではあるのですが、聖書を読み進めていけば、初めて起きた出来事でもないことにわたしたちも気づきます。もし、今の日本にこのような出来事が起きたら人々はどう反応するでしょうか。自分がこのやもめの立場だったらどうするか、自分がこの生き返った若者だったらどうするか。当事者ではなくこのニュースを直接見聞きしたらどうするか、マスコミをテレビを通して知ったらどう反応するか。さて、どうでしょう。

実際にどうなるのかあれこれ想像してみてください。古代のユダヤ人たちと同じようには現代では反応しないようにおもいます。

信仰者は誰でも救いを求めています。また、救済を求めているだけではなく、救われたから、その願いがかなったから、信仰にはいったという建前になっています。でも、心のどこかにわたしに、今このときに、イエスさまが現れて救ってくれないか、この状況を打開するなにかを与えてくれないか、わたしを苦しめるこの悪をこらしめて取り除いて欲しいと願い求めています。いまがハッピーという人を別にすれば（多くの人が苦しんでいるとすれば）これは当たり前前の感情です。また、その一方でわたしは救われているのだから安心していいのだ、神さまはきっわたしを導いてくださる、という気持ちももっています。

救われているけど恵まれていない、確かに救われているのだけど毎日が息苦しい、平安な心もちなんだけど夜は眠れない、誰でもこんな板ばさみ状態を感じることはあります。この板ばさみ状態、救われているのに救われている実感が伴わない現実、キリストは復活したのに苦しみはある、これは自分のことに限っても、また家族の間でも、地域でも、国でも、世界でも同じで苦しんでいます。この感覚は正常な感覚で、いまの現実と食い違ってはいません。じゃあ、だめじゃん、どうしようもないよ、となりますが、でもそうじゃないようにも思える。福音は告げられていることを信じる気持ちもちゃんとおある。残っている。この気持ちも呑み込んだ上で、板ばさみの苦しみがあることをご存知のうえで、イエス様さまは十字架の苦しみをお受けになり、わたしたちを含めすべての人の罪をあがなってくださったのではないのでしょうか。一人息子を失ったナインのやもめを見たイエスさまは憐れにおもい「もう泣かなくともよい」と告げられ、いったんは死に囚われた息子をやもめにお返しになったと福音は告げています。

-----